

富士紀行（19） 須走新五合目散策雑感

浅間とはあらぶる火の神であるという。浅間神社はこれに仕える神社である。富士宮市の富士山本宮浅間大社は、全国に1, 316ある浅間神社の総本宮である。

敬老の日（H12/9/15）に車で新五合目まで、翌16日には山中湖畔の「紅富士の湯」に出かけた。駄文を一つ。

のんびりした散策こそが最良

新5合目まで、かなりハードな登山道（別名：あざみライン）である。登山道を登り初めてすぐ、芭蕉の句碑がある。路傍にひっそりと建てられた碑は車を止めて眺める人として無く、荒れ果てていた。名物の大柳も朽ち果てていた。（芭蕉が何と詠んだか。句碑からは判読出来なかったもので、いずれアップする。）

さて、喘ぎ喘ぎ車は新五合目（旧太郎坊）に到着。登山道の途中に駐車しているのはキノコ取りの人であろうか。駐車は禁止されているのではないのか又、そうでないとしても車の止め方に一寸した心使いをして欲しいものだ。さて、カリヤス草原と幻の滝へとブルドーザー道を超えた。「あざみ」が一番多いのは、年々植えられているからか。急げば見落としそうな小さな黄色や白、所々には深い青色の花がカリヤスの中に点在している。山の花は慎ましやかである。驚いたのは、紋白蝶やその他の蝶、ミツバチが仕事をしていることだ。花の名前を知っていたらもっと楽しかろうにというのが実感である。

幻の滝は今時には水はないのは解ってはいたが、それでも岩場の景観も見応え十分だ。パラグライダー数人の安全を願いつつ、小富士に向かった。昼間はガイドも勤めるという山小屋の主人が大きな声で色々と説明している。その声の小さくなるのを背後に聞きながら進む。タケカンバやカラ松等の原生林の中にシャクナゲ、タケシマラン、マイヅルソウ、コウモリソウ等の草花がしっかりと息づいていた。行き交う老若男女色々ではあるが、こちらの挨拶に挨拶を返すのみで、行く末が案じられる。そして、何故あんなに急ぐのか。ゆっくりと木や花と話をしながらの散策こそが喜びであるべきなのに。

さて、小一時間の道を抜けるとどうしたことか、そこだけが樹木無く砂丘（山）となっている。樹海の中の開豁地である。晴れておれば山中湖や河口湖を足下に、振り返れば富士学校、須走そして御殿場から箱根連山を、顔を右に向けるれば富士山頂が見えるはずなのに残念なるかな雲と称すべき霧が全てを覆い隠してしまっていた。はまなしが可愛い。それと風衝樹型と称するのか松の枝がいずれも山中湖方へ流れている。風の強さを感じさせる風物詩である。

小山町の鳥はウグイスである。ウグイスは、富士山を境にして、ホーホケキョのホケキョの部分の長さが違うのだそうである。西に行くほど長いとか。

同じく町の花は菜の花であり、菜の花から作る「みず（かけ）菜」は町の名産である。同じく町の木は富士桜であり、自衛隊富士駐屯地の木も富士桜に指定され、先般の創設記念日に「創隊50周年記念植樹」が行われた。